

夢を紡ぐ^{つむ}
未来を織りなす風・林・火・山

火 の 章

～誇りを紡ぐ～

情熱を育むまち

近代日本経済の立役者にして、文化振興にも貢献した小林一三
宮沢賢治と友情を通わせ、自らの理想郷を追い求めた保坂嘉内
縄文大國 葦崎の調査・発掘に、生涯を捧げた志村滝蔵：
郷土が生んだ心熱き偉人たちは、葦崎に生きる人々の誇りです。

希代の実業家 小林一三

1873(明治6)年1月3日、河原部村(現在の葦崎市本町)の裕福な商家小林家に生まれた一三は、慶応義塾で福澤諭吉の教えを受け、卒業後は三井銀行に14年間務めました。

1907(明治40)年、銀行を辞めた一三は、実業家としての第一歩を踏み出します。かつて銀行の上司だった北浜銀行の頭取岩下清周の後押しを受け、大坂郊外に予定されていた新しい鉄道会社の発起人になると、それまで誰も考えなかった「沿線開発で利用者を増や

す」ため沿線を住宅地として整備して分譲販売し、また、動物園や温泉、レジャーランドなど、多くの人が遊びに来たくなる施設を作り、奇抜なアイデアを次々と実行していきました。そして、「田舎路線だから困難だろう」と思われていた箕面有馬電気軌道(後の阪急電鉄)の経営を安定させて、日本有数の鉄道へと導いたのです。

この成功を皮切りに、社会の変化に柔軟に対応した判断力と、鋭い経営感覚、そして迅速な行動力で、発電、

映画、劇場、野球、ホテルなど、幅広い事業を展開していきます。明治大正・昭和と続く激動の時代において、一三は多くの会社を設立・再建し、日本経済の発展に多大な功績を残しました。また、大臣を二度にわたって務めるなど、政治の世界でも活躍しました。さらに、俳句や茶道、芸術にも造詣が深く、晩年は自らが創設した宝塚歌劇を観劇し、茶道や書き物に勤しみながら、のんびりと暮らしました。1957(昭和32)年1月25日、心臓喘息で急逝しますが、葬儀は宝塚大劇場で宝塚音楽学校葬として行われました。

小林一三 (こばやし いちぞう) [1873-1957]

1873(明治6)年1月3日、河原部村の商家 布屋に生まれる。15歳で上京。慶応義塾卒業後、三井銀行勤務を経て実業界へ。阪急電鉄や宝塚歌劇団をはじめとする阪急東宝グループ(現阪急阪神東宝グループ)の創始者。生涯に多くの起業と再建を手掛け、鉄道を起点に都市開発や流通事業を一体的に進め相乗効果を上げる私鉄経営モデルを独自に作り上げるなど、その後の実業界に多大な影響を与えたことから、日本屈指の実業家と称される。第二次近衛内閣の商工大臣を皮切りに、幣原内閣の国務大臣、初代戦災復興院総裁などを歴任。政界でも活躍した。





小林一三生家跡(上宿「布屋」本家跡)

小林家は、「布屋」の屋号を持つ商家で、葦崎きっての大地主。一三はその分家の跡取りでしたが、生後間もなく母親が亡くなり、婿養子だった父親も実家に戻ったことから、本家の大伯父のもとで、大切に育てられました。公立小学葦崎学校に通っていた一三は、とても頭が良く、元気で、リーダーシップもあるガキ大将。皆から最高の尊称である「ぼうさん」と呼ばれていました。当時葦崎小近くにあった「蓬萊座」という芝居小屋に足しげく通い、仲間を集めては芝居のまねごとに熱中していたのもこの頃でした。

小学高等科卒業後は、当時新しい教育を行っていた八代村(現笛吹市)の私塾「成器舎」を経て、1888(明治21)年、慶応義塾の予科に編入。福澤諭吉から直接教えを受け、やるべきことに集中し、他に惑わされない「不関心」や、自分の考えを信じて自ら行動する「独立独行」(独立自尊)を学びます。これが、生涯を通じて一三の精神となりました。

上京後の一三が葦崎に帰省する機会は少なかったものの、実業家として成功した後私財を投じて映画館「甲府宝塚劇場」を設立しました。1966(昭和41)年には、市民会館の完成を記念し、一三の遺族から文化振興のための多額の浄財や備品が図書館に寄贈され、常に温かい眼差しが向けられていました。



一三が育った「布屋」本家(現在はならさき文化村)



一三の部屋があった「布屋」中宿分家(現存)

私にとっては思い出がいっぱいある特別な場所のひとつ。改めて考えると、不思議なご縁があったのかもしれないね



ふるさと偉人資料館



葦崎出身タカラジェンヌ神麗華さんと一三ゆかりの地を歩く

最初に訪れたのは、本町通りにある「ならさき文化村」。幼い日の一三が大伯父夫婦と暮らした布屋の本家のあった場所です。開口二番

は、まるでファンの少女のようです。

「懐かしい!」と声を上げた神さん。本町通りは、小学校への通学路。実家から近いこともあり、その頃は公園だったこの場所で毎日のように遊んだそうで、「私にとっては思い出がいっぱいある特別な場所のひとつ。改めて考えると、不思議なご縁があったのかもしれないね」と、感慨深げな表情です。

最後に訪れた観音山公園は、七里岩の突端にあたり、葦崎市を一望することが出来ます。眼下に広がる故郷を眺めながら「縁が多くて、心が落ち着く葦崎。私はこのまちが大好きです。上の墓地にはお母さんのお墓もあるので、一三先生も墓参の際にはこの風景を眺めたの

続いて訪れたのは、ニコリ内にある「ふるさと偉人資料館」。一三の写真を愛おしそうに見つめ、館内に復元されている茶室「即庵」や関連資料にも興味津々の神さん。往年のトップスターが並ぶ公演ポスターの前でキラキラと目を輝かせながら尽きない宝塚への思いや現役時代の思い出を話す様子

「懐かしさと同時に、音楽学校に入学した頃の新鮮な気持ちも蘇ってきました。一三先生の教えである、「清く正しく美しく、そして朗らかに」を、これからも私なりに実践していきたいと思えます」と、決意も新たに語ってくれました。



神麗華(じんれいか)

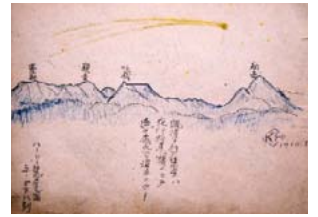
葦崎市生まれ 葦崎高校卒業後、1997年85期生として宝塚音楽学校に入学。1999年3月、宝塚歌劇団入団。雪組娘役スターとして数々の舞台で活躍した後、2010年4月「ソルフェリーノの夜明け/Carnevale睡夢」を最後に退団。2014年ブロードウェイミュージカル「シカゴ」宝塚歌劇100周年記念OGバージョンに出演。

火 の章 ～誇りを紡ぐ～



銀河鉄道展望公園から

嘉内が中学一年生の時に描いたハレー彗星のスケッチには、「銀漢ヲ行ク彗星ハ夜行列車ノ様ニテ」の書き込みがあり、賢治の代表作でもある「銀河鉄道の夜」を連想させます。このスケッチと同じ風景を楽しめる場所が、糠坂町の「銀河鉄道展望公園」。暗闇のなか、対岸の山肌を窓から光りを放ちながら下り列車が走り抜ける様子は、あたかも銀河鉄道が夜空に登っていくかのように幻想的です。嘉内は、「風の三郎」を祀った風神の祠など、他にも賢治の作品を連想させるスケッチを残しており、賢治の創作活動に大きな影響を与えた人物としても注目されています。



嘉内が描いたハレー彗星のスケッチ



アザリア会の中心メンバー。4人は熱い友情で結ばれていた。左上)保阪嘉内 右上)宮沢賢治 左下)小菅健吉 右下)河本義行

保阪嘉内と宮沢賢治

「アザリア」で結ばれた熱き友情

保阪嘉内は、1896（明治29）年、駒井村（現韮崎市）の旧家に生まれ、度々氾濫する塩川に畑を荒らされ、翻弄される農民を間近に見て育った嘉内は、幼い頃から農業に人一倍関心があったと言われます。

県立甲府中学校（現甲府一高）を卒業後、東北帝国大学農科大学（現北海道大学農学部）を志すも叶わず、浪人生活を経た1916（大正5）年に、盛岡高等農林学校（現岩手大農学部）に進学します。そこで待っていたのが、宮沢賢治との

た文章が過激な思想と判断され、嘉内は除名放校処分という厳しい処分を受けて学校を去ることとなります。「アザリア」も6号をもって終刊となりますが、熱い友情で結ばれた4人は、書簡を通して親交を続けました。

運命的な出会いでした。寮で同室になった2人は急速に親しくなり、河本義行、小菅健吉も加えた4名が中心となってアザリア会を結成。1917（大正6）年7月、同人誌「アザリア」を創刊します。会員12名の手作りによる小さな雑誌でしたが、この活動を通して文芸に目覚めたことが、賢治を創作活動へと誘い、「注文の多い料理店」や「風の又三郎」など、数々の名作を生み出すきっかけとなりました。残念ながら、約1年後に発行された第5号に寄せ



アザリア会の同人誌「アザリア」は、謄写版を使って12名の会員分だけ印刷され、学校や会員外の学生に配られることはなかった。



アザリア記念会

宮沢賢治と保阪嘉内の生誕110周年を機に結成された市民団体。韮崎市民を中心に、「アザリアの友」の友情を受け継ぎ、現在につなぐ活動を進めています。顧問には、嘉内の長男善三氏と次男庸夫氏も名を連ね、毎年、嘉内の誕生日である10月18日前後に、「花園農村の碑」の前で、碑前祭を開催しています。

保阪嘉内（ほさか かない） [1896～1937]

1896（明治29）年、駒井村の地主の家に生まれる。甲府中学（現甲府一高）在学中、クラークの愛弟子である大島正健校長の薫陶を受け、トルストイやキリスト教への強い関心を持つようになり、「農学を修め、村長になって故郷を模範的な農村『花園農村』にしよう」との理想のもと盛岡高等農林に進学。2年次修了後に放校となり、別大学への進学を目指すも母の逝去により帰郷。山梨県教育会、山梨日日新聞社、日本青年協会への勤務を始め、生涯に多くの職業に就いた嘉内だが、その根幹は「農人」であり、最期まで自らの理想とする「花園農村」の実現を追い求めていた。





坂井遺跡

縄文時代中期(加曾利E式期)の遺跡。丘陵の上であり、湧水もあることから、当時の人々にとって理想的な居住地だったと考えられる。浅鉢形の土器、土偶、滑車型耳飾り、土鈴、顔面把手など多彩な土器や、打製・磨製の石斧、石匙、石鏃、槌石、石皿、石錘、浮石、石棒、石刀といった数多くの石器、加えて、竪穴式住居などの住居跡などが多数見つかっており、その頃の人々の暮らしを解明する貴重な手掛かりとなっている。



遺跡発掘にかけた情熱 志村滝蔵

縄文王国、葦崎を夢見て

1879(明治12)年の道路工事で縄文式土器が発見されたことから存在が確認された坂井遺跡。その後、発掘調査を行い、全国に知らしめたのが、市民研究家志村滝蔵です。

志村滝蔵は、1901(明治34)年、駒井村現葦崎市藤井町の農家の次男として生まれました。考古学に興味を抱き、小学校5年の歴史の時間。当初は、畑仕事で見つけた土器や石器を集め保存していたに過ぎませんでした。が、考古学者八幡一郎との出会いや、考古学・人類学の権威鳥居龍蔵博士の指導により、探求心が深まってきました。

1925(大正14)年、実家の農業経営を任されていた滝蔵は、耕作地の改良に着手します。20年かけて一町畝の桑畑を天地返しするという壮大な計画の裏に



志村滝蔵 (しむら たきぞう) [1901 ~ 1971]

1901(明治34)年1月2日、父志村八百蔵、母りんの次男として生まれる。1913(大正2)年、藤井尋常高等小学校5年のとき、橘正太郎先生から石器時代の話を聞き石鏃(矢じり)を見せられてから考古学に興味を抱く。1923(大正12)年、長兄の死により実家の農業経営を担うこととなるも考古学への探求心は失せることなく、仕事の傍ら発掘及び研究を続ける。1948(昭和23)年、長男富三と共に本格的な発掘調査に着手するなど、生涯を通じて坂井遺跡の発掘に取り組むとともに、考古学の普及・発展にも尽くした。1971(昭和46)年4月3日没。享年70歳。生涯をかけて出土した約3000点の遺物は、坂井考古館に展示されている。

は、「深く掘り返せば必ずや考古学上の発見を得られるだろう」との目論見もありました。実際に、土偶、吊手土器、石器、土器製作の台形土器など、多数の貴重な遺物が発見されており、滝蔵はそれまでの成果をまとめた論文を、昭和初期に2度にわたって発表しています。

その後、戦争により中断された発掘活動でしたが、1948(昭和23)年の年明けから、ジャワより復員した長男富三と共に再開。山梨県郷土研究会や藤井小

中学校の協力も得ての大きな発掘調査へと発展し、多大な成果を上げる一方で、1950(昭和25)年には、自宅敷地内に「坂井考古館」を作り出土品を展示するとともに、竪穴式住居を復元して郷土研究や学校教育の場として提供するなど、考古学の普及・発展にも尽くしました。

大正、昭和の県内考古学の黎明期にあつて、ゆるぎない情熱を持って遺跡発掘に取り組んだ滝蔵。その炎は、70歳で生涯を閉じるまで激しく燃え続けました。

縄文王国 葦崎

葦崎には縄文時代のムラの跡がいくつも発見されており、早くから人間が住みついたと考えられています。坂井遺跡と後田遺跡から発掘された土偶は、縄文時代の信仰を伝えるとともに、その造形は高い芸術性の存在をうたえており、当時から高い文化を持っていたとも考えられています。

大英博物館へ招かれた2つの土偶

平成21年には、市内で発見された2つの土偶が、イギリスにある大英博物館の「THE POWER OF DOG」に招待され、展示されました。これらは、日本の縄文文化の象徴ともいえる土偶の特徴を示しており、芸術性も高いと評価された原始美術品と言えます。



立像土偶

坂井遺跡から発掘した縄文中期の土器、渦巻き模様を飾り付けた結髪と、大きな下腹部が特徴。妊婦を表していると考えられている。

仮面土偶

後田遺跡から発掘した縄文後期の土偶。顔につけた仮面が特徴。膨らんだ腹部は子どもを授かった女性を表現していると考えられている。

夢をカナエル・カエル ～偉人の情熱に倣って

葦崎が誇る3人の偉人は、とっても熱い心を持っていたんだね。何かを成し得るには、この熱い心が大切なんだ!すべての市民が自分の夢に向かって情熱を持って進んで行けるよう、ニーラも応援するよ。

